
from.

薬屋 ドクダミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

from .

【Nコード】

N1631BA

【作者名】

薬屋 ドクダミ

【あらすじ】

そいつが居る部屋は麻帆良女子中等部の校舎、その端にある【カウンスリングルーム】と銘打たれている教室。普段は怠惰に大学の課題レポートに喘ぎ、知り合いとお茶をするような彼のお話。今日もお部屋の椅子の上、ぼうつとしていた彼に舞いこむ厄介事は、どんなお話であるのだろうか。原作知識が色々と危ういです。見逃してくれるとありがたいです。

f r o m : i 彼の終わりと始まりの季節（前書き）

周りの作品を見ていたら楽しそうだなあ、なんて。そんなありきたりな理由で書き始めました。

この主人公、ごつつ主人公らしくないやつであります。でも、そんなやつも受け入れてくれたらな、なんて。

色々と捏造設定とか酷いかもしれないけれど、気にしないのが吉。作者はノリと脳直で書いてますいえー。

f r o m ・ i 彼の終わりと始まりの季節

「…する！よく頑張ったな」

春。卒業式。

学を修めたもの達の別れと旅立ちの場は、魔法世界においても変わりはない。

粛々と式が終わった喧騒の後、そこから隠れるように教室で一人の生徒と教師が話し合っていた。

「君はよくわからない方向に走ることはあつたが…良い生徒であつたよ」

「それは俺より皆さんの方がおかしいからそう見えるだけででしょう……」

教師の笑い声、生徒は真面目そうな顔立ちで黒髪黒目。極東を思わせる出で立ち。その顔を苦々しげにゆがめていた。

「まあ、楽しかったつすよ。毎回毎回馬鹿騒ぎしてましたし」

ああいう悪戯は好きです、と彼は楽しそうに笑った。

一転、教師は顔をしかめる。

「出来ればそれはやめてほしかったね。君たちは迷惑を掛けることが好きなのか……」

相当に嫌な思い出だったのだろう。教師の顔は今もそれをされてるかのようだ。

「しかし……本当にいいのかね。この国を出ていくなど」

「ええ、俺にとって学問は追及するものじゃなくて、活かすものですから。活かせる場所は、ここではありませんし」

そう、ここ……学園都市アリアドネーでは卒業して出ていく者は割と少ない。そのまま残って研究をつづけたり、騎士団に入ったりするモノが多いのである。

対して彼は卒業したのち、旧世界へ行くと言いだした。

生まれが旧世界であるので実際には戻る、が正しいのだが。

これに学園側は渋る。何故ならやっтерることはおかしいが、成績もそれなりでありなにより旧世界固有の技術を持っていたのだ。それも、最高水準で、だ。

魔法世界では旧世界の技術をさげすんでいるが、アリアドネーではその土着の魔法技術を貴重なものとして保護する活動が一部で始まっている。その一環としても技術を提供していた。

その彼が旧世界に戻る、というのだ。彼としては「教えるところは教えた」し、全てを提供しなければいけないわけではないと思っっているが、唯一のプロが消えることは学園にとっては痛いことである。結局、彼の意思を尊重すべきであるとの意見が大多数になり、彼は旧世界へ戻ることになった。

「そうか。それならいい。……ああ、そういえばこれを君に、と」

「これ……推薦状？」

教師から渡されたのは袋綴じの封筒。表には推薦状と大きく書かれている。そんなもの頼んでいた覚えは彼にはないし、渡される理由もいまいちよくわからない。

「ああ、卒業祝いと技術提供の謝礼みたいなものだそうだ。君には旧世界、極東のある学校へ行ってもらうことになる」

「へ？いやいや、俺はてつきり適当に送りだされるだろうから、向こうで一年浪人勉強して学校行こうと思ってたんですが」

「そうだろうな、上もそうするだろうと予想していたらしい。その中でどうせなら学校にはこっちの推薦で行けるようにしよう、と言いだした者たちがいたんだ」

なんとなく彼の脳裏によぎるのは、技術提供で臨時講師をやった時の生徒たちの好奇心が透けて見えるような輝く瞳だった。あの中に学園の教師や発言力を持つ者がいたのかもしれない。

「それは正直ありがたいですね……時間、無駄にしなくて済みますし」

「それにな、お前の力を無駄にしたいくないという意見も重なった。どうせなら活かせるところで活かしてほしいと」

本人の意思もそうだろう、そう言いたげな顔で教師が告げる。彼は内心、ここまでしてもらっていいのかと困惑気味なのを隠して笑みを浮かべた。

「ありがとうございます……！願ったりかなったり、です」

「いいさ、生徒を導くのは教師の役目だ」

教師の鑑がここにいる……！というかこの国本当にすげえ！なんて感動に浸っているとあることに気がついた。

そう、まだどの学校へ行くのかを聞いていないのである。

コレ、開けていいですかと断りを入れて封筒を開けてゆく。魔力確認で自分以外開けられない封じを外し、中から書類を取り出すところ書いてあった。

麻帆良学園大学部にて心理学科への入学

そして麻帆良学園女子中等部でカウンセラーとして働くこと

「……………はい？」

そうして彼は旧世界極東関東魔法協会へと赴くことになったのである。

f r o m : i 彼の終わりと始まりの季節（後書き）

多くの方には初めまして。もしかしたらどこかでお会いしてるかも
しれませんが名前も変えているので久しぶりの方がいらっしやっ
ても初めまして。

薬屋ドクダミと申します。

なんでネギまの二次なんて初めてしまったのかなんて、読んでるだ
けじゃダメになったからです。わお、あくていぶ！

更新は不定期になると思います！。ストックなんて造らずに書いた
もの全部パなしてやんぜ。途中で投げ出して逃げても勘弁してくだ
さいな……。

f r o m t h e a n o t h e r w o r l d . : - 1 (前 書 き)

彼の過去バナ的な何かです。

地味に転生系。実は転生系。そんな作品になるんじゃないかな。

「……あ、……っが、く」

痛い。痛い。痛い痛い痛い痛い。

身体の中に熱湯でもぶち込まれたかのように。もしくは腹の中で花火がドバドバとその綺麗な花を咲き誇らせているかのよう。

ただ、ただ思う。もし自分がもつと強かったら。

もし、自分に勇気があったなら。

もし。自分がこんなにも　弱くて、脆くなかったら。

そんな痛みの中で、意識すら曖昧で世界すら霧の中であるようなその間で

きつと俺が生まれたのはその瞬間

強くなりたいなら　弱さを捨てる

勇気が欲しいなら　甘えを捨てる

弱さともろさを失くしたいなら　強くなる

目が覚めたのは痛みのお陰。気を失えないのもきつとコレのせい。ガッ。ガッ。定期的に響く痛みの他に何も例えようのない刺激で俺の意識は水没していなかった。

ああ、このままじゃ死ぬ。もし肉体的にはどこも問題がないとしても、このままでは死ぬ。身体じゃない、俺と言う意識が殺される。死ぬ、死ぬ、死ぬ……いくらそう思っても、自分は壊れなかった。

ああ、本当に脆くなくなったの？

そう思ったけれど、もう全て終わった後。

やり直しなんて出来ないのだから、何もかも遅かった。

そのうちに俺の視界に映ったのは

赤。

いや 火、か。

「ああ……」

間違いじゃなかった。そんなのは声にもならない。

確かに、自分は熱いのだ、痛いのだ。

痛みでそれを自覚してるはずなのに、急に吹っ飛んだ状況を頭が理解していないせいでなんとなく他人事だと思っていたソレを再確認。

ああ、あの丘ではいつもは子供が遊んでいた。

あの畑では心やさしい老人が作物を収穫していた。

あの木の下では、あの女の子が。

そして痛みは増した。

「……………」

もう声も出ない、きつと自分はこのまま朽ちてゆく。意識が朽ちて

身体は燃えて、俺が居たと言う証はこの世界から消失する。

ふっ、と視界が明瞭になった。

一瞬、一瞬だけ火に包まれる自分の居た世界を記憶に焼きつけてでも、今までの思い出は全てを燃やしつくすような業火にくべて

グッバイ。

誰かがそつつぶやいた気がして。

それが自分だとわかったのはちょっと後のことだった。

f r o m ・ 2 彼の来日と彼女の迷走（前書き）

……まあ、悩みを抱えてるって言ったらまず彼女かな、と。
ひねりもなにもないけれど、普通の麻帆良に来る系のお話。

from・2 彼の来日と彼女の迷走

麻帆良学園女子中等部の校舎。その一番端のすごく目立たないところにその部屋はある。

扉には「カウンセリングルーム」と銘打たれており、すりガラスで中の様子は見えない。

ただ時折ガサガサと物音が聞こえたり紅茶の匂いが漏れ出したりしているからきつとその部屋は今日も仕事中的なだろう。

長谷川千雨がその部屋の存在を知ったのは月の初めに配られる学級通信だ。普段なら碌に読まずに流し見てすぐにゴミ箱へ行く運命をたどるのだが、中等部へと進学して非常識度が今までより上がったためにつかれていた彼女は帰ってくると鞆を放り出してベッドに寝転がった、その時にそのプリントが鞆から飛び出てきた。

それをストレス解消のために思いっきりくしゃくしゃに丸めて捨ててしまおうと思ったのだが、端に書いてあるひとつの項目に目をとめた。

「今年度からカウンセラーが変わり、新たにカウンセリングルームが設立されました。いつでもお気軽にどうぞ。カウンセラー 木

殻 知友」

カウンセリング。それは今の千雨が求めるものだった。そうか、もしかしたら愚痴を聞いてもらえるかもしれない、悩みを分かってもらえるかもしれない。そんな希望的観測が現実主義で皮肉屋の千

雨の頭から飛び出る程度には疲れていたのだ。

普通の彼女なら間違いなく、どうせそのカウンセラーも非常識なヤツで、まともに自分の悩みなんぞ取り扱ってもらえないのだろうと。けれどまあ、一種の現実逃避として希望に縋ってみる、そんな状態。

少し前から始めているHP作りも放り出して、今日は早く寝よう。それで明日にでもそのカウンセリングルームへ行ってみよう。彼女はふらふらと夕食を作りキッチンへと歩いて行った。

魔法世界と旧世界をつなぐゲートを出て、久々の旧世界の空気を思いつきり吸い込んだ。そのまま深呼吸をする。なんとなく故郷より空気が乾いてる気がして、少し物足りない気分になる。

「ここからしばらく空の旅か……」

飛行機はあまり好きじゃない。向こうで自分で飛ぶことに慣れてしまったせいも、あの鉄の塊が魔力も無しに飛ぶことと自分の命をソレに預けることが怖い。

それを思うと……帰ってきたのに、少し憂鬱になる。

けれどそんなことを思ってる暇はない、と頭を振ってそんな負の気分を飛ばす。せつかく帰ってきたのだから、少しくらいこの国を觀光していききたいのだが実は時間がないのである。

アリアドネーで推薦状を貰ったその日、寮に帰って中身を改めるとかなり急がなければならなかった。少なくとも次のゲートが開く日には旧世界へ戻らなければならぬ。アリアドネーからチケットを用意されたゲートまでの距離を考えると早急に荷物をまとめて出発しなければならぬ状況である。

どうしてギリギリまで何も言わなかったんですかっ！とアリアドネー教師陣を問い詰めたのだが「ああいうのは卒業式に渡した方が雰囲気出るでしょう？」なんて答えが返ってきた。その気持ちもわからなくもないのだが、このいらだちをぶつける相手がない。仕方ないので教師たちには最後の最後で得意の悪戯を仕掛けて、見つかる前に逃げるように出てきたのである。

……今頃、終わった書類が白紙になっていることだろう。俺の魔法はそう言うのが得意なのである。

「とにかく、さつさと空港行こう。それで早く向こうの寮に入っ
てゆっくりするんだ」

多分そうは出来ないんだろうなあ、なんて予感が自分の中で叫びまくっているのを無視して、俺は自分を奮い立てた。

ぷシュー、と音がなって自動ドアが開く。こんな駅の電車のちよつとしたところでも、永く離れていた故郷を感じさせる。どうやら、思っていたよりもホームシック…国のことでもそう言うのかは知らないけれど…だったららしい自分に苦笑。

学園都市麻帆良…今日から、自分が住むことになる地である。アリアドネーからの推薦ということで、駅に迎えが来ていると知らされている。事前に連絡もしたし、いつの電車に乗るかを知らせたのでもう駅で待っているはずだ。

次々と電車を降りる人たちの中に混じる。荷物は少し多め。他の荷物に関しては売り払ったり、先に送っていたり。入寮するために早めに住所を知りたいし、送らなければならぬのでどこの部屋であるかを聞くとはぐらかされてしまったが、荷物を代わりに送ってく

れると言つので預けてある。多分、大丈夫だろう。貴重なものは大
体手持ちであるし。

改札を出て、駅の建物を出てあたりを見回す。さてはて、迎えの
方はどんな人だろうか。

少し魔力を出す。これを待ち合わせの合図として使用していた。魔
法使い同士であるから、魔力を感じればこちらに気付く。こういう
ところで便利な魔法使い、素敵。

「もしかして、木殻 知友君かな？」

後ろから声を掛けられる。駅の中に居たのか……気付けなかった自
分を少し貶して、それから振り向く。

「ええ、そうです。貴方は……タカミチ・T・高畑？」

「ああ、そつだよ。まさか知っているとはね」

「そりゃ知ってますよ……！有名人じゃないですか」

そこに居たのは魔法世界でも有名な魔法使い、タカミチ・T・高畑
さんだった。魔法を使えないから立派な魔法使いでこそないが、同
じレベルで功績をあげていると噂には聞く。

そんな魔法使いを迎えに寄越すだ……！？すごいな、関東魔法協
会。

そんなことを考えていたら、タカミチさんは苦笑した。

「有名人か……、そうなるのかな、一応。でも、君もそれなりに有
名だろう？>>紙符術使い ベーパーマイスタ <<」

「げ、よしてくださいよ……。二つ名とか俺が負うにはいまいち力不足ですし、あんまり好きな名前じゃないんです」

「ごめんね、と笑いながら返すタカミチさん。どうやら結構フランクな性格のようだ。思わず、こっちも堅い言葉がでなくなる。」

「よし、じゃあ学園長の所まで案内するよ。」

ようこそ、麻帆良へ」

そう言つて、タカミチさんは笑った。

渋いなあ、と俺は思った。

学園長室は何故か女子中等部の校舎に在った。

……なんでだよ。なに、学園長室つてこつ、別の教師用の校舎とか、もしくはそれだけで一棟あるような所にあるんじゃないの？

そう疑問に思いつつも女子だらけの校舎を進んでゆく。どうやらタカミチさんはここで教師をしているらしい。成程、だから俺が一緒にいても怪しまれない訳か。

とはいえ、あまりにも多くの女の子が居る所を歩いて行くのだ。俺もまだ年頃　ちなみに18である　であるから、こつというのは少し気まずい。

偶にタカミチさんに俺のことを聞く生徒がいたり、俺自身に挨拶をしたりする子もいた。そう言つ子には会釈を返しておく。

そして歩くこと少し、高級そうな扉が現れた。タカミチさんがノックをした後に入つて行つたので、俺も慌てて付いて行く。

そこに入ってすぐ……俺は懐に仕舞ってあった符を全て取り出して臨戦態勢を整えた。ついでに背中のバックに詰め込んである切り札たちの起動準備をする。

さあこれでいつでも戦える……！

「フオツフオツ、初めまして、じゃの。ここの学園長をやっておる、近衛近右衛門じゃ……ってなんでそんなに符を持っておるのじゃ！」

つて、え？

「ご、ごめんなさい！どうにも人間にはあり得ない頭部をしてたんで普通に敵かと！」

「言い切りおった！この子いきなりわしの気にしてること思いつきり言いおった！」

「まあまあ、いつも初対面の人にはそう言われるんですから、いい加減慣れてください学園長」

「タカミチ君!?!」

気を取り直して。

「アリアドネーからの推薦で来ました、木殻 知友です。これからこちらの大学でお世話になります」

「つむ、君の評判は聞いているよ。治療術師だそうじゃな？」

「ええ、未だ未熟ではありますが、治癒の魔法を中心に修めました」

そう、俺がアリアドネーで学んだのは治癒術だった。最初は少し変わったものが学びたい、という気持ちで。それから誰かの役に立ちたいなんて心もあったし、それならと治癒術師の道を選んだ。まあ向こうにいる間それが役に立ったのは、主に悪戯の後始末であったのはなんとというか皮肉である。

「それでこちらで学ぶのは心理学か。将来が楽しみじゃ」

フオフオフオ、と笑う学園長。

まあ問題なのはもう片方である。

「学園長、この書類にある、カウンセラーとして働くというのは…」

そう言って推薦状を鞆から取り出して、封筒の中から記入した書類を渡す。

「そうじゃな、実はこの校舎の端に使っていない部屋があつてのう。そこでカウンセリングをして欲しいのじゃ」

いやいやいや。

「俺はこれから心理学の勉強するんですよ？そんな奴にカウンセリングさせるなんて……それにここ、女子の校舎じゃないですか……」

「なに、やる気があれば大丈夫じゃよ」

ここはそういう場所じゃ。そう無責任なことを言って学園長は話を締めた。

後から思い出せば、それは多分認識疎外の結界のことだったんだろ
うな、と思う。ここではあらゆる事が起こっても不思議じゃない、
なんて思考のところなのだから。

時は放課後、授業が終わって帰り途を急ぐ生徒や部活へ向かう楽
しげな生徒のなか、千雨はカウンセリングルームへ行こうとした…
…の、だが。学級通信をにらみつけるように見まわしてからにが
がと吐きだした。

「…場所、わかんねえじゃねえか…！」

そう、一番重要な場所が書いていないのである。

とはいえ教員などに訊くのも悩みがあります、なんて自分から言っ
てるようなものだし、後のことを考えると色々干渉されそうで、ソ
レは避けたい。

けれど場所がわからない。カウンセリングルームと言えども、辿り
つけないれば存在しないも同じなのである。

そうして探し回っているのだが、一向に見当たらない。まさか別
校舎か？それも有り得る。なにせこの学園都市は馬鹿でかいのだ。
もしかしたら別の場所の建物のことかもしれない。

でも、それならわざわざ女子中等部^{ウチ}には載せねーか。

ならやはりこの校舎にある。そう信じて歩き回る。
そうして彼女が校舎の端にあるその部屋を見つけたのは、20分ほ
ど後のことだった。

f r o m . 2 彼の来日と彼女の迷走（後書き）

結局進んでねえじゃねえか、と自分で自分に突っ込んだお話。
本当は千雨編ここで完、だったのになー。

二つ名は彼のスキルから。アリアドネーに行ったのもこのスキルが
交渉材料になるためです。
過去編、気が向いたら位の頻度で入れてきますよん。

f r o m t h e a n o t h e r w o r l d . . . 2 (前書き)

過去バナその2

実は過去バナは自分でも何書いてるかわかんなかったりするけれど、結構重要なファクター……だと素敵！

貴方は死にました。

……そう。結局、なにも出来なかったんだ。

冷静だね。

一周回って。本当はいつぱいいつぱいだよ。

もう一度、生きてみたい？

なんにもやれなかったから、もしかしたらそうかもしれない。

もしやり直せるなら、貴方は何をしたい？

わかんない。

未練はある？

さっき生まれたばかりだよ、なんにもない。

さっき、生まれたばかり？

そう。俺が生まれたのはあの火の中。

どうして？貴方はあの村で平穏に暮らしていたのに。

じゃあそれは別人だよ。その俺はもう居ない。
弱い自分はもういらぬ。だから今ここに居るのはそいつじゃない。

貴方、変わってる。

そうなの？

でも、そんなあなたが好ましい。

ありがとう。

だから貴方にもう一度、チャンスを与える。

チャンス……？

そう。世界を見ずに感じられずにここに来てしまった貴方に、
私がもう一度だけ機会をあげる。

そんなこと、できるの？

貴方にはその権利があるの。ううん、無くても貴方にもあげる。
義務とも言ってもいい。

なんで、そんなに。

ふふ、やらないって手はないの。だって私がそうしたいんだ
もの。

ねえ、貴女は、なに？

曰く、神は存在しないからこそ全知全能であり。

曰く、悪魔は存在するからこそ無知無能である。

よく、わかんないよ。

ふふ、それでいいの。

いくつか、貴方に証をつける。

それは目印。それは武器。それは盾。

いつかきつと、役に立つ。

貴方が幸せな人生を歩めますように。

最後、綺麗な笑顔を見た気がする。

誰かが笑ったのか、そう見えただけなのか。わからないけれど、ソレは目に残っているし

「グッバイ」って声も、耳に残っている。

どこかで波の音が聞こえて、引いて行った。

f r o m t h e a n o t h e r w o r l d . . 2 (後書き)

ホントはコウケイムトウ、でしたっけ、悪魔の方は。
もう誰の言葉でどこを見たかも覚えていないけれど。

さてさて、後に活動報告でちょっと色々ネタバレ裏話を載せられ
ばな、と思っております。

興味のある方はチェックしてもいいんですよ？(チラッ チラッ

f r o m ・ 3 彼の初めてのお客さんは彼女（前書き）

色々に加筆してるうちに主人公の主張がめったためたでぐっちやぐちやですがその辺はフィーリング推奨、頭足りない作者にはむづかしいのですイエア！

本当に意味のわからない系なので、後書きに書きたかったことちよつとまとめておきます…うう、力量不足。

f r o m 3 彼の初めてのお客さんは彼女

「本当にここであつてるよな……?」

長谷川千雨は飾り気のないドアの前に立っていた。上半分は磨りガラスで下は木、白く塗つてある引き戸……つまり、一般的な学校のドアである。

それなら普通に目的の部屋であると思つのが普通であるのだが……ある一点において千雨はその判断に困つていた。

中に誰の気配もしないのである。

ここがそのカウンセリングルームであるとしたら、放課後は営業時間であり、カウンセラーが中にいるのだろう。

けれど今千雨が立つ扉の向こうは電気は付いてないし、物音は聞こえない。本当にここであつてるのかと思わされてしまう。

ドアに「カウンセリングルーム いつでもお気軽にどうぞ」と書かれているから間違いではないハズなのだが。

よし、とりあえず入ってみよう。それで中に誰もいなかったらまた今度だ。

そう考えて引き戸を引いてみる。

開かなかった。

鍵がかかっていたのだ。千雨はその事実すぐに辿りつくとうなだれた。

せっかくここまで来たのによりによって開いてないのかよ……！
というか普通カウンセリングって放課後とか、休み時間にやってる
はずだよな？え、なんで開いてないのここ。サボリ？カウンセラー
はサボってんのか？

まとまらない思考とあふれ出てくる愚痴。あーもう、と頭をわしゃ
わしゃと掻き上げて、千雨はそこを離れようとするが。

そこでちょうど、そのドアが開いた。

「へ？」

中に人が居た……？いや、でもさっきまでそんな気配はなかったの
に。

そうしてそのドアへと視線を移すと、部屋の中側に誰かが居る。

ああ、カウンセラーか、と納得してその人物の顔を見る。

黒髪黒目、背は平均より少し高い程度だろうか。同じクラスである
龍宮よりは小さい。あまり特徴はないが、整った顔。髪は男性にし
ては少し長めで後ろでゆるく縛っている。

あちらも千雨のことを見て少し驚いていたようだが、すぐに調子を
戻すと喋り出した。

「お客さん、かな？ようこそ、カウンセリングルームへ」

「あ、ええと」

「とりあえず中入ろうか。まだ整理し切れてないけれど、立ち話よ

りはマシだと思つよ」

「え、えっと……お邪魔します」

言われるままに部屋の中へ誘われた千雨に、君がお客さん第一号だよ、とどこかきこちなく、それでも優しい笑みを浮かべた。

がったん。がさがさ、どすん。

部屋の中にそんな音が響く。その原因は自分の手元にある荷物たちだ。

学園長との話を終えた後、どうやら俺の荷物はここに運び込まれているらしいということを知った。

ここはカウンセリングルームと銘打っているが、一部屋ではなくカウンセリングルームとして使用している部屋の奥にもう一室備えられている。

どうやら昔の宿直室と仮眠室を改修した部屋であるらしく、宿直室は生徒の相談を受け付ける部屋に、仮眠室はなにかのためにリフォームして残してあった。

俺の寮……というか寝どことして割り当てられたのがその仮眠室だったのである。ご丁寧 kitschenまで備え付けられているが、部屋自体殆ど使われていなかったようで全体的に小綺麗だ。

その奥の部屋で荷ほどきをしていたのだが……よく考えたら今日の夕飯すらない。ちよつと何か買ってこようかと部屋を出たところにちよつとお客さんがいらつしゃったという訳だ。

それでそのお客さんは今カウンセリングルーム……ああもう、長いから次から相談室って呼ぼう……のソファに腰掛けている。少し落

ち着きのない様子。

まあ当然か、とちよつと苦笑が浮かぶ。

こんな辺鄙な所で知らない男と二人きりなのである。そりゃだれでも警戒するだろう。

だからその緊張を解すために。今の俺はジュースを取り出していたりするのだが。

「オレンジジュースって大丈夫かい？」

「え、ええ。何でも大丈夫です」

「そかそか。あと、これちよつと欧州の方で買った葡萄ジュースなだけでさ」

「……それってワインなんじゃ」

「あはは、流石にアルコールは……あれ？これ本当にワインじゃないか。つてことは……学園長に挨拶代わりに渡したワインの方がジュース!？」

後で取り替えに行こう。そう決断。

お客さんである少女を見ると少し笑っていた。笑うなよ、恥ずかしくなるから……。

冷静さを取り繕って少女の前にオレンジジュースを出す。彼女は「ありがとうございます」とちよつと小さい声で囁くように言って、それを一口飲んだ。

「……おいしい」

「気に入ってくれたようでなにより。日本じゃ流通してないんだぜ？」

全くメーカーもやってくれればいいのになーなんて。

「そういえば、まだ自己紹介もしてなかったね。今年度からここでカウンセラーをやらせていただくことになりました、木穀知友です。先生でもないしそこまで偉くもないから、友人みたいに接してくれると嬉しい」

「……1 - Aの長谷川千雨です」

「オーケー、長谷川さんね」

第一ステップ、自己紹介は成功。掴みは上々、さてどうしようか。そういえば1 - Aって……

「タカミチさんのクラスかな？うん、楽しいクラスだとは言っていたけれど」

「楽しい、クラス？」

俺が繋ぎでその一言を口から出した瞬間、長谷川さんの気配が変わった。

え、あれ？もしかしてもう地雷踏んだ？

怒髪天を突く……そんな言葉に相応しい雰囲気で長谷川さんはこう切り出した。

「ふふ、あれは楽しいクラスですよ、ええ、傍から見ればすごくたノシでしょうね。高畑先生も高畑先生ですよ、なんで担任がしょっちゅう出張に行くんですかそんな立場だから楽しいなんて言えるんでしょうねもうクラスメイトもみんなおかしい奴ばかりだしどうみても小学校低学年な奴らから明らかに大学生だろってヤツまで幅広いし拳句の果てにはもう人間か怪しい奴まで信じられますか口ボまで居るんですよウチのクラス！なんか忍者っぽいやつもいるし似非中国人みたいなのやつもいるしずっと欠席してるのとかもいるし……」

ぶつぶつぶつぶつと後ろに暗い黒いオーラを纏って話を続ける長谷川さん。ああ、ストレス溜まってるんだなあと思う。

そういえばアリアドネーでも友人が何回かこんなふうになっていた。そのいずれもがレポート提出前であったのは彼自身の性格が災いしていたのであろうが。

……しかし、だ。

話を聞く限り……この子には麻帆良の認識疎外結界が効いていないのだろうか。

先ほど学園長からこの麻帆良についての説明は受けている。この学園都市全域には魔法を秘匿するための認識疎外強力を含む強力な結界が常時展開されている。

そのおかげで麻帆良の人々は普通ならあり得ないことに対して常識なほどにおおらかだ。

だから麻帆良にある異常性は外部へと漏れだすことはない……らしいのだが。

彼女は、長谷川千雨はその中において「外の常識」と言うものを保

っている。異常を異常と認識出来ている、のだ。

それはつまり、この結界が効いてないということに他ならない。生来の体質という線が一番濃厚か。彼女が強力な護符を持っている、という可能性もあるがそんな気配はしない(……………)

辛かったらうな。

「外の常識」を保つ。それは、麻帆良の常識を否定する行為だと言っている。彼女の眼にはさぞ奇異に映っただろう。

麻帆良の異常な技術と、それを当り前であるかのように受け入れる周囲。

それをオカシイ、なんて思うのは自分だけで、誰にもわかってもらえなくて、ずっと一人で耐えていたのだろう。

強いな。

そんなことを思ってしまう。いや、憧れてしまいそうだった。

ここで同情の言葉なんて投げかけてはいけない。彼女が欲しいのはきっとそうなのじゃないから。

結局、自分は強く生まれ変わるなんてのは

波の音が聞こえる

被りを振って頭から思考を飛ばす。拙い、それ以上思い出すなとわめく意思にしたがってそれをシャットアウト。

なにより自分は今人の悩みを聞いているのだ、自分のことは後回し。

「…だからやっぱりここおかしい、…って、あ……」

どうやら長谷川さんはやっとこっちに戻ってきたらしい。うん、色々吐きだせたようだなによりである。

「あ、あの、ごめんなさい！いきなりこんなこと捲し立てて……！」

「いやいや、そういうのを聞くのも俺のお仕事だしね。それに愚痴なんてものは溜めこまずに吐きだしてしまっただけが絶対がいい」

「うう……」

顔を赤く染めて俯いてしまう長谷川さん。ていうかよく見るとすげー美少女。ロリコンじゃないんで普通に可愛いつて感想だけしか抱かない。

「それに麻帆良がおかしい、か。うん、そうだね。俺も今日麻帆良に来たばかりだけれど、目を点にするような出来事は何回もあつたし、思わず叫びそうになつたくらい」

情けない話だけどね、と言いながら自分に苦笑い。

彼女が欲しがっているのは、多分ただ同情する哀れみじゃなくて、それを分かち合える……わかってくれる人。

……けれど、俺にそんな都合のいい役を演じる力なんてないのだ。だから、俺はただ彼女を肯定するだけ。

彼女自身は本当に間違っていないのを知っている。

このままじゃ彼女は壊れてしまいかもしれない。常識と麻帆良の常識の間で押しつぶされそうな彼女を、俺は壊れて欲しくないと思っ

た。

それから長谷川さんと自分のコップにジュースを注ぐと、彼女が目を点にしていた。

んー？なにかおかしいこと言ったか？それともジュース？

「わかるん、ですか？」

「何が？ああ、麻帆良がおかしいってことかな。うん、色々心当たりはあるよ。まだ来たばかりだからそう思ってるだけかもしれないけれど」

「……………」

沈黙。

あれ、ミスった？

「大丈夫かい？どこか具合が悪いのなら保健室に行こうか？」

「いや、そうじゃなくて…………オカシイって言うの、分かってもらえるの、初めてで」

ああ…………そうだろう。彼らはそう認識出来なかったのだから。いや、させてもらえなかったのだから。

彼女の悩みを解ることが出来るのは…………【こちら側】に踏み込んだものだけであるし、なにより彼女自身がその悩みをひた隠しにしてきた。

だから今日、初めてあった自分がこうして言えるのも、偶然に偶然

が重なっただけ。

……運命的、だなんて言葉は使いたくない。

「まあ、俺は君の悩みを解ることができるといいたいだし、ね。うん、色々言っただお陰で、少し楽になったんじゃないかな」

「あ……」

嘘八百。解ってるわけじゃない。知ってるだけだ。けれどそれでも、少しくらいいいカツコしたい。

ちよつと表情を崩す長谷川さん。うん、やっぱり美少女だよこの子。

「また溜めこむ前に今度はここに来ると良いよ。愚痴ぐらいだったらいくらでも聞いてあげるし、飲み物とかも出そう」

「いい……んですか？そんなことまでしてもらっても」

「俺、一応カウンセラーだから」

それなら、また来ます　　彼女はそう言って花のように笑って、この部屋を出て行った。

少しだけ、罪悪感が湧いたのは何故だろう。

私は目を剥いた。それから疑った。

こいつは本当に私の言っていることがわかっているのかと。

今まで私がいくら訴えても誰もわかってくれなかった、信じてくれなかったことを、あっさりと信じたのだ。

疑われない方がおかしい。どうせ、仕事だからそう言ってるだけなんだろうと、そう思っていた。

でも、どこかで……私のことを解ってくれるかもしれないって。味方になってくれるかもしれないって、信じてたんだ。

けれどそいつは平然として「保健室に行く？」なんて言ってきた。味方じゃなかった。

わからない。

本当に信用していいのかわからない。

けれど……また、愚痴を聞いてもらいに行こう。

私はそう思えた。

f r o m ・ 3 彼の初めてのお客さんは彼女（後書き）

結局彼は彼女を本当の意味では救えなかった、みたいなお話だと思っ
てください。

同情しないと言いつつしてたり、わかってるけれど解ってあげられ
ない、そんな矛盾に富んだお悩み相談。解決はしてないけれど、少
しは負担が減るんじゃないかな、千雨ちゃん。

f r o m ・ 4 彼と彼女と学園祭（前書き）

マシンガン投稿。地味に一週間くらいのストック全部最初でぶっ放すつもりです、インパクトはあるでしょう、竜頭蛇尾だけど！

……あ、ちなみにこのお話は原作3 - Aのクラスが中学校に入学したあたりから始まっています。

from・4 彼と彼女と学園祭

「学園祭、ねえ……」

今日から三日間、麻帆良学園は喧騒に包まれる。

理由は簡単、今日からまほら祭……つまり、学園祭なのである。

ただ、学園祭とは言ってもその規模は尋常ではない。

この三日間で数千万円稼ぐサークルもあるという話から、その規模はうかがい知ることができるであろう。

そんな学生の晴舞台ではあるが、ここ、相談室は通常営業中である。

「本当、あいつらも元気いいよな……」

「それは否定しないけれど、どうして君がここにいるのかな

千雨ちゃん」

そこにはこの数カ月ですっかり顔なじみになった、長谷川千雨の姿があった。

ご丁寧にもノートパソコンまで持ちこんで、応接用のソファを一人占めしている。もう殆ど彼女の指定席と化しているのだが、一度他にお客さん来たらどうすんだと訊いたところ

「どうせ私以外誰も来ないだろう。それにこっち（おくのほう）のソファはお前の席だしな、遠慮なく占領出来る」
との答えが返ってきた。

ついに年上に対する敬意すら取っ払ってくれました。友人みたいに

接してほしいなんて言ったの俺だけだよ。

「あの非常識なノリについて行くのは私にとっちゃ苦痛なんだよ……。本当は寮の方にも籠って居たいけど、どーせウチのクラスのやつらが突撃してくるしな……」

オレンジジュース飲む？と勧めると紅茶、と一言。図々しいなんて言葉はもう出てこないほど彼女はここに馴染んでいる。そういえば、出あった日から一人で居るよりこの子と居ることの方がずっと多い気がする。

「でもクラスの出し物とかあるんじゃないの？」

「中等部の一年まではクラス単位での出し物はないんだよ」

知らなかったのか？みたいな表情で目を細めてこちらを軽く睨む千雨ちゃん。この子のそういう目は割と心に突き刺さるんだよね……。

「そうだったんだ。まあ、今年から赴任だからねえ……」

「だから私は何の心配もなくここに居座れるって訳だ」

「……まあ、ジュースくらいは出すさ」

紅茶派だって知ってるけど俺はこのオレンジジュースを勧めてやるぜ……！いずれ千雨ちゃんもオレンジジュース党にするのだ。計画は始まったばかり。

あ、でも。学園祭中とはいえ俺も用事くらいはあるわけで。

「けど三日目はここ閉めるぜ」

「はあっ!?!」

目を見開いてこちらを睨む千雨ちゃん。どうせずっとここで暇をつぶす予定だったんだろう。少しの罪悪感とざまあ見ろって気持ち。

「俺もカウンセラーとはいえ、教師みたいなものだからね。正規の教員の方よりも少ないけど、業務があるんだ。三日目は見回りと救護テントの手伝いしてるよ」

この仕事は学園長に任されたものであったりする。事の起こりは今から二週間ほど前、世界樹広場であった。

「今夜十一時、世界樹前広場に集合……?」

そんなメールが回ってきたのは今日も今日とてカウンセリングルームにてだらだらと過ごしていた時である。ちゃんと日々の書類も書きあげて、大学の講義にも出席しているからこそだらつとしていられるのだが。

このメール、集合すること自体はいい。場所も世界樹前広場なら妥当だろう。

「夜の十一時、ねえ……。明らかに真つ当な会合じゃない」

時間が遅すぎるのだ。この時間ではかなり不都合が生じるのが普通。なら普通じゃないモノなら、どうか。

「大方、魔法関係者の集まりか。顔見せとかも兼ねてるのかな」

それなら行かない訳には行くまい。こういう場にはちゃんと顔を出しておかないと、後で相当手痛いしっぺ返しを食らうことになる。

今夜は早めに夕食摂るかな、なんて考えながら一応札と切り札達の準備を進めた。

午後十時五十分、世界樹前広場。

少し早めに行動するべきだろう、と考えて俺は既に指定の場所へと来ていた。もちろんそれなりに符を仕込んで持ってきたりしてあるし、魔法発動体である小さな時計を首に掛けている。

それではしばらく待っていると……続々と湧いてくる魔法関係者。出るわ出るわの大盤振る舞い。関東魔法協会として大勢の魔法使い達がいるということは知っていたがここまで居るとは。

中にはまだ学生であるかのような子も見受けられる。だって制服着ているのだから、嫌でもわかる。

「や、木殻君」

唐突に横から声を掛けられた。目をやれば今日も髭が洪くてイカしてるタカミチさん。

「タカミチさん、お久しぶりです」

「そうだね、前に会ったのは出張前かな」

「そうですねー。今日も相談室は通常営業、閑古鳥が鳴いてました」

「それは……」

「別にいいんすよ、俺の仕事は無い方がいいですし」

「まあ、君が言うなら、それでいいのだけれど」

そんな感じで軽く言葉を交わして、タカミチさんは学園長の方に歩いて行った。よほど学園長に信頼されてるんだろっなあ。タカミチさん程の腕前と人格なら納得できる。

「それでは、始めようかの」

そうして待つことしばらく、学園長が集会の開始を宣言した。

集会の内容は予想通り、顔見せが主であるかのようだった。

今年から学園に関わるもの達が次々に自己紹介と得意な魔法や剣術などを話している。

そうして自分の番。

「ええと、アリアドネーから来ました、麻帆良大学部心理学科所属兼中等部カウンセラーの木殻 知友です。治療師ヒーラーで得意なのはミドルレンジ。よろしくお願ひします」

そう言って頭を下げる。拍手してくれたところから見るとそれなりに上手くいったようだ。胸をなでおろす。

そうして顔見せが終わったあと、学園長が話し出した。

「諸君、もうすぐまほら祭が迫っております」

まほら祭。学園祭のことか。

「そこで君たちにはまほら祭期間中における学園内の見回りをお願いしたいのじゃ」

なんでも学園長が言うには、どうにも麻帆良の生徒たちは武の面で優秀すぎる《……》所があるようで、一般の先生方には対処できないような事態が起こることもあるらしい。

そこで、常人より力を持った魔法使い……魔法先生と魔法生徒、と言っらしい。なんだか可愛らしいじゃないか……達に対処してもらうのだとか。

「担当日時、区域等は後に知らせよう。それでは今日はここまでじゃ」

解散。その声で集まっていた人々は方々へと去ってゆく。そんな中で自分も行こうとしたのだが

「おおっと、木殻くん。少しいいかな？」

俺だけ学園長に呼び止められた。見れば、俺以外にも幾人か呼ばれた人がいるみたいで、学園長の周りには何人かいる。

そこにちょっと掛け脚で近づく。俺がつくと学園長は話を始めた。

「さて、ここに呼んだもの達は魔法使いの中でも治癒に長けたものじゃ。君たちには救護テントの手伝いをしてもらいたい」

ここで少し、治癒魔法について説明しておく。

治癒魔法はただ「なおれ」と念じて使うだけでは、余り高い効果を及ぼすことはない。

本当にその力を使いこなしたければ、人体の構造を把握し、どのような怪我であるのか、どうすればこの怪我が治るのかを理解して使わなければならない。

つまり、治癒術師は普通の医療においてもそれなり以上の知識を有するのである。

だから魔法が使えなくても、救護の手伝いくらいなら十分……という訳だ。

だから学園長はこんな面子を集めたのだろう。

俺は学園長からの依頼を二つ返事で了承した。

結局、学園祭中に予定なんてないのであるから。

後に配布されたプリントには、三日目に見周りて救護の手伝いがあることが書かれていた。

「おいおい……それなら三日目私はどうすりゃいいんだよ」

「別に普通にお祭りを楽しめばいいんじゃない？」

ここに居るよりは……と言おうとして飲み込む。

千雨ちゃんにソレは当てはまらないから。彼女にとってこの三日間

のお祭りは多分一番キツイ時期であるだろうから。

「楽しむって言ったってな……」

「屋台回るだけでもいいさ。ということ、はい」

千雨ちゃんに財布から千円札を二枚ほど取り出して渡す。

突然のことだから彼女は上手く状況が飲み込めてなくて呆然として
いる……それがちょっと、可笑しかった。

「俺と千雨ちゃんの分の昼ごはん、適当に見つくるってくれないか
な。屋台で焼きそばとか買ってきてほしい」

「なんで私がそんなこと……」

「ごめんね、ちょっとやることがあるからさー」

仕方ねえな、とソファから立ち上がる千雨ちゃん。

この子、一見付き合い悪そうに見えてものすごくお人好しなのであ
る。お礼に残ったお金はあげることしよう。

いってらっしゃい、と部屋から出ていく千雨ちゃんを見送った後、
俺は一旦奥の自室に引っ込んだ。

やること、と称してわざわざ彼女を部屋から追い出したのは、魔法
関連のことであつたから。

扉に鍵を掛けてドアノブに札を貼る。この札は魔法的な鍵を掛ける
と同時にその存在を一時的に認識から外す効果を持つ。つまり、い
ま相談室側からは真つ当な手段ではこの扉を見つけることが出来な
いようになっている。意図的にそこを盲点にする、と言うとわかり

やすいだろうか。

次に部屋の四隅に在る札に気を通して起動。部屋を囲む結界を形作る。

これでこの部屋は完全に密室になったと言っている。

「さて、始めますか……」

俺の本職はこつちなのだ。

毎度あり、という屋台の主の声を背中に聞きながら二人分の軽食を持って帰り路を歩く。

ここに来るまでに様々なイベントや屋台、人を見てきたがやはりオカシイ。ため息ももう幾つ吐いたかわからないほどだ。

最もこのことを共有できる人間はこの人ごみの中には居ないのだろう。それは今までの人生で嫌なほど教えられてきた。だから私はこのことを人に話さないし、出来るだけ関わらないようにしてきたし、今もそうしている。

本当にあいつが私と同じ　ココがおかしく見える　なのかはわからない。カウンセラーだから、と嘘を吐いて私に合わせて居てくれるだけかもしれない。

あのカウンセリングルームとは名ばかりの休憩室でいつもいるあいつ。

私に来るたびにオレンジジュースを勧めてきて、私以外があのカウンセリングルームに来たのを見たこともないから本当に仕事をしているのかどうかあやしいけれど。

あいつは私に向き合ってくれたのだ。下らない、なんてまともに取り合ってくれる人なんて居なかった私の悩みを、真摯に受け止めてくれた。

嬉しかった。あの言葉が嘘でも本当でもどうでもいい。それだけで誰もやってくれなかった簡単なことだけど、それだけで私はあいつを信頼してしまったのだ。

普段は現実主義を気どっているのに、あいつならなんて、希望に縋ってしまう程度には。

それにあの部屋は自分でも不思議なほどに心が落ち着く。わからないけれど、長く居座ってしまっくらいには心地いい。

早く帰ろう。そう思って私は少し、歩く速さをあげた。

f r o m ・ 4 彼と彼女と学園祭（後書き）

主人公は一体なにやってるのさー！

ヒント：外部内部を遮断するほど強力な結界。

ホントウ、って言った彼の本心。

彼の出身は西。

……うん、ヒントでギリギリだよ、色々。

さて今から実は出来ている次話との間に入れる予定の過去バナ書いてきます。筆が乗るぜいえー！

f r o m t h e a n o t h e r w o r l d . . . 3 (前書き)

彼の過去バナみつつめ。今回は絡めもなくさらっと行っちゃいましたよ。次あたりでの子との絡みがあるはずだ……っ！

自分がそうだと認識したのはいつだったか。

両親がほめてくれるから。そんな純粹な理由だった。

だからソレが異常だなんてことも知らずに、ただひたすらに努力した。

多分最初はまだ小さい時。

親父が行ったソレに、俺は懂れた。

俺の前で舞い踊るソレら。綺麗で、繊細で、緻密な美しいソレはいくら初歩の初歩と言っても、幼心を魅了するには十分だった。

それから俺は親父に頼み込んだ。アレのやり方を教えてくれ、アレは一体どうやっているのか。

親父は拒んだ。

それから数年しただろうか……親父は俺にソレを教えると言った。

その時は嬉しさで飛び上がるほどだった。ああ、アレが自分でも出来るようになるんだ、親父のように慣れるんだと。

それを教えてもらう前に、まず心構えを学んだ。親父は真剣な顔で教えてくれた。

今まで温和で母に小遣いと胃袋を握られている親父しか見てこなかった俺は、それだけでソレのために本気になった。心構えも必要なことだと、自らの心に深く刻んだ。

それから毎日修行の日々。ただ、ただ幼心地で魅せられたあの景色を自分で作るために。

本当にあの頃の俺はどうかしていたのだろう。周りが全く見えないほどに魅せられて、打ち込んでいたのだから。

それに気付いたのは多分、8歳のころか。

親父に免許皆伝を貰った時、初めて自分の周りに渦巻くそれらに気がついた。

期待、悪意、羨望、嫉妬……数えるのも馬鹿らしいほどに、それらは……感情は渦巻いていた。

その感情が全て自分に向けられたものであると気付くのに、時間がかからなかった。

俺はいわゆる天才、というヤツであったようだ。普通、ここまで……免許皆伝をいただくまでには膨大な時間がかかるらしい。それを俺はまだ幼子の内に成してしまったのだ。

友人はいない。家族だけ。中には自分に友好的に接してくるものも居たが、幼いがゆえに悪意には敏感。そのような輩はみな自分から突き離れた。

……いつ、だろう。いつの間にか、親父の視線の中にも、嫉妬が滲んでいると気付いたのは。

そしてそれから、俺が世界に対して興味を失い、絶望したのは。

f r o m t h e a n o t h e r w o r l d . . . 3 (後書き)

そんなお話。彼はここからどんどん負の方向へと全力疾走して、こけて、寂しくて戻ってきません。

その結果が今の相談室。

f r o m 5 彼と彼女と絶望と(前書き)

今回のサブタイトルの彼女は前までの彼女じゃなかったり。
解りにくいッ！けれど多分このままです。誰が来ても彼と彼女。

f r o m . 5 彼と彼女と絶望と

麻帆良祭から2週間。学園祭後もくすぶっていた生徒たちの火も静まりを見せ、落ちついた雰囲気に戻ってきた今日この頃。

俺はいつも通り相談室のソファの奥、自分の仕事用の机に突っ伏してまどろんでいた。

今日のやるべき仕事は既に終わり、大学の講義もなし。まさに暇をもてあました大学生状態。今日は千雨ちゃんも来ないようだし、他にやることもない。趣味は魔法関係なので今やるのは難しいので、こうして呆けているのだ。

しかしこのままではいけない。このままただらだらと過ごして居たら間違いなくダメ人間になる。

そう思ったがゆえに頑張つて行動開始。かなり上質な座り心地のいい椅子から立ちあがり、部屋の隅にあるコーヒーマイカーへと歩み寄る。

このコーヒーマイカー、最初からこの部屋に備え付けられていたものである。俺自身そこまでコーヒーマイカーを嗜む訳ではないが、眠気覚ましや課題のレポート提出期限前などにはよくお世話になっている。……シ、仕方ないだろう？ほら、魔法関係の研究やっていると時間なんて湯水のようになくんるんだよ。

ダイオラマ魔法球？あんな馬鹿高いもの買えるわけ無いだろう。あくまで俺はちよつと魔法に関わっている貧乏大学生なのである。

ぼうつとしているうちにコーヒーが出来たようだ。決してその間少し意識が飛んでいたとかそういうことはない。ないっつらないのだ。

コポコポ、とカップにその黒い液体を注ぐ。決して詳しいわけではないし、今回淹れたものもそこの店で適当に買った安ものだがなんとなくこの香りは好きである。紅茶もいいが、俺はこっち。

そしてカップと、取り出したお茶菓子を持って相談用のテーブルの上におこうとした時である。

がらつと引き戸が開いて、中に一人の女生徒が飛び込んできた。彼女は相談室に入るや否やすぐに扉を閉めてその場に座り込む。

俺はと言うとこの事態に頭が追いついていない……訳ではなかった。多分彼女はここを空き教室かなにかと思って飛び込んできたのだろう。今この生徒を追うように、扉の向こうから「ゆえー、どこだー！」という声と影、それにバタバタと走り去る音が聞こえたから、鬼ごっこでもしていたのだろうか。

校舎内で鬼ごっこはあまり関心できないなあ、なんて呑気な考えをしていた俺に、その生徒が視線を向けた。

うん、わかるよ。空き教室だと思って飛び込んだら中に人が居て、しかも部屋が割と小奇麗であると来たもんだ。その上俺はコーヒーとお茶受け持ちでティータイムと生活臭丸出しである。おまけにさつきまで走ってたのだからどこか混乱して正常な思考とは言えない状態だろう。

混乱の極地で俺と見つめ合っていた彼女に、とりあえず声を掛ける。

「コーヒー、飲む？」

やがてとりあえず乗ろう、と言った感じで頷いた。どうやらまだ混乱してるらしい。

女生徒さんの分のコーヒーを入れて彼女の前に出す。あまり上手くないけれどねと言いつつ訳しながらなのがなんとも格好がつかないのは御愛嬌。

彼女がコーヒーを一口飲んで、落ちついたところで俺は話し始める。

「さて、いらっしやい。ここはカウンセリングルーム。生徒のお悩みを聞くための部屋。もし今悩んでいることがあったらいつでもどうぞ。愚痴をこぼすだけでも、ちょっと休憩に来るだけでもいいさ」

「……カウンセリングルーム？ということは貴方は……」

「そう、カウンセラーの木殻 知友と申します。まだまだ未熟な身の上だから、本当に悩みを聞くくらいしか出来ないけれどね」

本当に格好の付かない男である。

よかったらお菓子もどうだい？あ、頂きます。なんてやりとりを間に挟んで。

「……1 - Aの綾瀬 夕映です」

ちゃんと自己紹介を返してくれた。礼儀正しい子なのがわかる。育

ちもいいのかなあ、とりとめのない思考。

「綾瀬さん、ね。何か悩みはあるかい？相談したければ受け付けるぜ」

けれど、彼女の眼を見た時に俺の考えは全部吹きとんだ。

ないならこのままお茶会にしよう。そう冗談を飛ばして笑う。そんな気の効かない冗談しか、飛ばせなかった。

そう、冗談。この部屋には悩みのないものは来ることは出来ないし、見つけることも出来ない。

そういう効果の認識疎外系の符を貼っているのだが　それはいいとして。

つまり、ここに来る子はみな悩みを抱えている子だけなのだ。初めはそうでなければ見つけれられない。二回目以降はちゃんとした場所を覚えるため来ることができるようになるが、そもそもここに入り浸るような子なんて千雨ちゃんくらいである。

……あ、この子千雨ちゃんと同じクラスか。ということは偶に彼女が漏らしている非常識的不思議クラスの一員さんになる。

けれど綾瀬さんのことは千雨ちゃんの愚痴から聞いたことはない。それに俺から見てもごくごく普通の生徒さんである。

見た目は、だけれど。

彼女のその目はいつそすがすがしいほど、どす黒く濁っている。

彼女の姿の後ろに、いつかの誰かを重ねて見た、そんな気がした。

「悩み、ですか……。あるにはあります。けれど」

「俺が信用できない、か」

「……っ、はい、です」

凶星のようだ。そうだろう、俺は見た目も若いから経験豊富とは言い難いし彼女は異性だし頼れるようなところを見せたわけでも、強さを見せたわけでもない。

そんな人間を信用する方がおかしいのだ。うん、彼女は正しい。

「話したくない話つてもあるだろうさ。無理強いしたら逆効果だからね、綾瀬さんが話したくないなら仕方ない」

「……………」

濁っている、彼女の目が少しだけ明度を上げた気がした。

「そんな目するなよー。カウンセラーだから悩みを聞かなきゃいけないって思ってるほど俺はワーカホリックでもないし、堅い思考はしてないつもりだ」

彼女の眼にはまだ疑いの色が残っている。さてはて、一体何が彼女をここまで追い詰めているのだろうか。元気盛りの女子中学生には珍しいタイプかもしれない。

あーでも、相談室こたむにくるのはそんなのばっかりか。

「今日のところはのんびりお茶会。もしいつか話す決心がついたらまたここに来て聞かせてくれよ。相談に乗るくらいなら出来る」

「……………いえ、貴方を少しだけ信用する気になったです」

お？

「私の目を、ずっと見ているのがわかったです。悩みをちゃんと受けようとする態度があるのも」

「……中学生にそこまで言われるかあ。うん、喜んでいいのかどうか」

「人が褒めたのですから喜ぶところです」

「他にもしごらみがあるんだよ。ちょっとした意地とかちっぽけなプライドとかね」

きつとそれだけじゃない。

彼女は無意識に俺に自分を重ねたんじゃないか。

閑話休題（そんなものは置いておいて）

「それで、話してくれるのかな。君のお悩み」

「ええ、少しだけですけれど」

少し、内容を整理するので時間をください。彼女がそういうので、俺はその間にコーヒーを注ぐことにする。コーヒーメーカーまで行って戻ってきたときには、もう整理を終えているらしかつた。

「それでは、お話するです」

彼女……綾瀬さんは自他共に認める本の虫だ。そんな彼女はあま

り友人が多い訳ではなく、むしろクラスでも一人で本を読んでいることの方が多かった。

そんな彼女に四月、ある不幸なことがあったという。それからというものの、常に落ち込んで……いや、絶望していたそう。

それを見かねた二人のクラスメイトが彼女に声を掛けた。クラスメイトは積極的に話しかけてくれたり、遊びに誘ってくれたりするそうなのだが、綾瀬さんにとってはいい迷惑。

先ほどもそのクラスメイトから逃げていて、偶然見つけたこの部屋に飛び込んだ、というのが今回のこと。

……それにしても、全てのことが下らなくなるほどの絶望、か。

まるで自分の昔のころのよう。

「……そう、わけです」

語り終えた綾瀬さんは、顔を少し伏せた。声に抑揚はない。

「……」

彼女への対応を考える。元からそこまで頭の回る方ではない。

ここで気の利いたことが言えなければいけないのだが、あいにくとそんなことが出来るほどいい男ではないのである。

なら、直球にそれを言うべきだろう。

「綾瀬さん」

「なんです」

「多分綾瀬さん、もう貴方は世界に絶望なんてしてないよ」

「え？」

呆けた表情を見せた彼女。そう、彼女の声は無理矢理抑えて落ち込んでいるような。

全てに絶望してる、なんて言い難い声をしていた。

「綾瀬さんは頭が良いんだろうね。柔軟で深い考えを持つてる。だから本当はもう気付いてるはずなんだ。自分はもう絶望なんてしてないって」

「……どういふことです」

わずかに言葉に怒気が滲んでいる。

そつだろつ、先ほど会ったばかりの男がまるで自分のことをわかったかのように言葉を紡ぐのだ。

気持ち悪いに、違いない。

「本当はもっといいやり方もあるんだろうけれどね、俺はこうしてしか言えないや」

「質問に答えるです！一体どういふことなんです！」

立ちあがって上から俺をにらむ。身体を乗りだして迫る。

鬼気迫る表情ではあるけれど、その顔は

どこか、親とはぐれて泣き出しそうな子供を思わせた。

「綾瀬さんがこの部屋に飛び込んできた、友達と追いかけてこした時」

だから俺は言葉を吐く。あやすように、なだめるように。そんな優しいことは、俺には出来ないから。少し乱暴になってしまっけれど。

「ちょっと、楽しそうな顔をしていたよ」

確かにそれは、年相応な少女の表情だった。

「……あ……」

彼女も思い当たったらしい。

そう、それなら俺の役目は終わり。

あとは聡明な彼女自身が解決するだろう。

それにあの時みた顔は。

「可愛らしかったしね」

思わず口を突いてでた言葉。あ、まず。

先の言葉で呆けていた彼女が更に「は？」と言った顔になる。

おっかしいなあ、俺さっきすっげえかつこよく決めた気がするんだろっけどなあ。

そんなことを考えていると彼女の顔がだんだん赤くなっていく。やっと不意を打った言葉を頭が理解し始めたらしい。

「な、な、な……」

「や、ごめん。俺自身も予想外の台詞が飛び出た。忘れてくれるとありがた

」
「ッ！？」

俺が全て言い終える前に立ちあがっていた彼女はそのまま走って相談室を出て行ってしまった。脱兎のごとき速さで。

……まあ、言うべきことは言ったし後は先も述べたとおり彼女は自分自身で解決するだろう。

それより俺がいま解決すべき問題は

…「コーヒー、こぼれちゃったな。

まずは雑巾を取ってこよう。

最初は、厄介な所に飛び込んでしまったと思った。

クラスメイトから逃げるために駆けている途中、偶然見つけただけの部屋だった。

表にかかっていた看板も碌に見ず、空き教室と決めつけて入ったものの、実際はカウンセリングルーム。

ある意味ドンピシャで、ある意味最も避けたかった場所。

中に居たのは年上ではあるが、恐らく成人はしていないだろう男性。第一声が「コーヒー飲む？」だなんて、今考えれば間抜けにも程がある。

けれど彼はどこか優しい雰囲気を感じていた。頼りなさそうな華奢

な身体だけれどすべてを受け入れるような、そんな印象を抱いた。

それに、彼はきつと強い。自分をずっと、真摯に受け止めようとしてくれていた。臆せず、慢心もせず、自分と同じ土俵に立とうとしてくれた。

彼にそのつもりはなかったのかもしれない。けれどそれはすごく好ましく思えて、彼がカウンセラーだと言うから、少し悩みを話してしまった。

……流石に、祖父の死については言っていない。そこまで深く話せる相手ではない。

全てを聞き終わった彼は、何も言わなかった。

最初は何も言えないだけだと思った。ああ、彼もか。そんな印象さえ覚えた。

でも、彼は言った。真中ストレートでド直球。愚直なまでにまっすぐに私の心をとらえた。

人間、凶星を突かれると激昂するというのは本当なのだろう。それを身を持って知った。

本当はとっくに気付いていた。けれどなんとなく意地になって目をそらしていた。彼はそれを的確に突いてきた。

だから私は思う、彼は一体何なのだろうと。

どうしてそこまで自分のことを解ったのだろうか。

答えはいくら考えても上手く形にならない、もしかしたらその材料さえ出てきていないのかもしれない。

いつかこの気持ちを完成させよう。そうしたら、彼に少し近づける、そんな気がするから。

いつもより少し幸せな気持ち。

ああ、この気分が続いている間にまずはクラスメイト達と向き合ってみよう。

私と向き合ってくれた彼のように。

f r o m ・ 5 彼と彼女と絶望と（後書き）

夕映ちゃん可愛いつすわー。思わずヒロインにしたくなるレベルで可愛いです。

でも主人公ロリコンじゃないんですねー。

どうしよう、そう言えばこの作品恋愛系の要素はないかもしれない。

f r o m t h e a n o t h e r w o r l d . : 4 (前 書 き)

過去バナよっつめ。

サブタイトルに異世界から、なんて銘打ってるわりには彼に前世の記憶がなかったりする件。

転生モノじゃないんですかやだー！

……まあ、転生モノである意義は後々、かな……。

免許皆伝を貰ってから、今まで“子供であるから”という理由で遠ざけられて居た「仕事」に参加させられるようになった。

俺はそれを喜んだ。ああ、やっと今までの努力が実を結び、それを活かすことが出来るのだ。周りの尊敬していた彼らと同じ所に立つことが出来るのだと。

仕事は、そんなに甘くはなかった。大人達は最も死の確率が高い仕事に俺をほつり込もうと画策していた。

もしかしたら、俺を生きて帰す気はなかったのかもしれない。目障りだった俺を後腐れなく始末することが目的だったのかもしれない。仕事で帰らぬ人となるのは珍しいことではなかったし、俺が子供だと言うことで出る非難も「免許皆伝を貰っていたから実力は十分であるし、仕事において年齢はさほど関係ない」とでも言えば、鎮めることが出来てしまう。

そして仕事は始まった。初仕事だと俺は張り切っていた。皆の役に立てるようにと、全力で。ここで頑張れば、心の底から褒めてもらえるかもしれないなんて。

最初は簡単な仕事。残留した瘴気の浄化、浮遊霊の整理、術具の整備。

こんなのじゃ、認めてもらうことは出来ない。そう思って焦っていたころ、ある仕事が回ってきた。

仕事の内容は某山中に湧いて出た鬼の始末。

同じ仕事を任せられた者達からは、隠すこともしない同情の視線で迎えられた。こんな仕事に参加させられる子供の俺を、哀れんでいた。

その時の俺は一心に打ち込んでいた以前までとは違って周りのことにはある程度目を向けるようになっていたけれど、そういう感情で見られる事は多々あったから無視していたんだとおもっ。

だから、どうしてそんなふうに見られていたのか、本当の意味を知らなかった。

その仕事のなかでの俺の班の役割は 囧。

俺はそんなことを知らされずにいたことを考えたら、本気で始末する気だったんだと嫌でも気付く。

役割を果たした仲間たちは皆、転移符を使って逃げて行った。

囧だと言う役割を知らない俺は、転移符を持っていなかった。逃げることは、叶わなかった。

だから、戦いを続けて。

気付いた時には周りに動くモノはなくなっていた。

俺は森の中で、膝について呆然自失の状態であったという。

全ての鬼を俺が倒したと知って、俺の周囲に渦巻く感情の渦は更に汚くなっていった。

まずその事実は隠蔽され、手柄は大人達のものになった。転移が遅れた俺を、大人達が助け、鬼たちを全滅させた、それが真実になった。

しかし、人の口に戸を立てることは難しい。俺が全ての鬼を倒したという噂は次々に広まっていき、更に噂には尾鰭がついた。

いわく、俺が鬼の子であると。いわく、鬼を食いつぶし力を得たと。

ゆえに、鬼子と。

その噂が広まり、俺が続く仕事で功績を上げて行くに連れて、真実味をおびてくる。すぐに両親からも突き放され、誰も味方のいない状況は簡単に出来上がった。

俺に向く感情は全てが負の方向のモノへと変化し、影では化け物と蔑まれ、表では皮肉と嫌味、それに俺を利用しようとする者しかない。

幼子の俺が現実には絶望するには、十分だった。

作った符を納めるために、関西呪術協会の総本山 長の屋敷へと上る。

ここまでは一人できた。親から与えられた家は京都市のハズレにあるため、電車やバスを乗り継いで。

噂が立ち、親から突き放された俺は家を一軒与えられて追い出された。仕送りもしてくれているが、未だ俺の年齢を考えればおかしい事であるのは間違いない。

そんなことはもう、どうでもよくなっていた。

総本山へと上る階段を越えて平坦な道を歩く。監視の目であろう式神達の視線がうるさい。子供一人でここに来るといふのはあまりにおかしな話だから、警戒を強めているのかもしれない。

……もし俺が最近噂の子供だと、鬼子だとしたらそいつらはどん

な反応をするんだらうな。
考えてもしようがないことばかり考えてしまっ
少し、寂しかった。

「これが、今回の分です」

「確かに。ご苦労様でした」

持ってきた風呂敷を解いて中身を改めて本山の術者に渡す。
本山の人達は他の人達に比べれば優しく、そういえばまだ両親に
つれられていた頃に見た長も穏和そうな人であったから、長の気風
なのかもしれない。

とはいえあまり長居する用もないし、早々に立ち去った方が面倒は
ないだろう。

そう思つてすぐに立ち上がり、本山を辞そうとする。

「もし、桐香の子ですか」

声を掛けられた。

【桐香】は両親の屋号。代々符を作り呪術の字と時を綴ってきた俺
の家が継いできた裏での店の名前。今は疎遠になつてこそいるが、
その子と言えば一人っ子であつたから俺しかいない。

「……はい。両親は桐香の屋号を継いでいます」

声を掛けられた方に身体を向け、背筋を正す。

果たして、そこに居たのは関西呪術協会の長、近衛詠春であつた。

「ふむ、そうすると君が知友くんか。立派になったものです」

「……長、何か御用でしょうか」

関西呪術協会、日本の裏のおおよそ半分の上に存在し、なおかつその頂点に立つようなお方。
少なくともこのような時間に、まして俺なんかに構っていることは無いはずである。

「なに、部下の子が来ているのです。少しくらい顔を見ても、不思議なことはないでしょう」

「よろしいのですか？」

色々な意味を一言に籠める。

「いいですよ。以前、貴方の作った符を見せてもらいました。あれは素晴らしい出来だ、この年であれだけのものを作るなら天才と呼ばれるのも頷けます」

「ありがとうございます」

天才、か。そのように最後に呼ばれたのはいつだろう。最近は何のことも表だつて本心から評価する人は少ないし、裏で呼ばれても専ら「鬼子」の方だ。

……別にそれになにを感じている訳でもない。ただ少し、懐かしかった。

「報告書では仕事の方も確りとこなしている。将来が楽しみです」

「そう……ですか」

将来。そういえば未来のことなんて考えたことがなかった。
今の評価しか言われたことは無く、黒い噂が絶えないような人間。
それに俺は与えられた仕事を淡々とこなしている、機械のような、
そんな人間になっている。

自分の意思での未来なんて、想像したことがなかった。

「知友君、君はきつと優しい人なのでしょうね」

「……は？」

唐突に何を言うんだこの人は。

思考が止まった頭。長はこちらの心を覗き見るかのような、鍛えられた目でもって俺の本質を見抜くかのように、俺を見据えた。

「いえ、ただの独り言です……。引きとめて、悪かったですね」

そうして、俺と長は別れた。

本山を降りるとき、視界の隅で遊んでいた二人の女の子がやけに
瞼の裏に焼きついた。

本山に居たころの彼のお話でした。

余談……かわかりませんが、彼の家は代々符や術具を作ることを主に置いていた一族です。自分たちでその効果を試しているうちに、戦闘にも参加するようになっていったというあくていぶなご先祖様たちの家系です。

その中でも神様から直接印を貰った彼の才能は破格で、通常なら十余年は掛ける修行を8歳……開始して3、4年で修めました。

コレに関しては実はちよつと前世があつた影響があつたりなかつたり、とか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1631ba/>

from.

2012年1月6日20時51分発行